
夏ホラー2008参加作品三作短編集

ミラージュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏ホラー2008参加作品三作短編集

【著者名】

Z2358F

【作者名】

ミラージュ

【あらすじ】

夏ホラー2008「百物語」企画に投稿した『禁断』三作を一つの短編集としてまとめました。かなり不快な内容となつておりますので観覧するしないは自己責任でお願い致します。

暗い田舎町（前書き）

観覧注意

この作品集は全て残酷な描写を含んだ内容になつております。
もし、読まれている途中で気分が悪くなつたり、生理的に受けつけ
ない場合は観覧を中止して下さい。
宜しくお願い致します。

都會から遠く離れた田んぼが広がる田舎農家の裏山に建てられた小さな墓地集落。この春、四十年の勤務を終え警察を定年退職した俺は若くしてこの世を去った後輩とその家族の墓参りにこの地を訪れた。

将来が有望出来る優秀な刑事だった。俺も長年この仕事をやってきて大切な仲間を殉職という形で失った経験は他にもあつたが、あの事件だけは一度と思い出したくないあまりに残酷で恐ろしいものだつた。

そう、あれは忘れもしない去年の七月一十九日、田曜日の真夏に起きた忌まわしき記憶。俺の刑事としてのキャリアを締めくくる、壮大な大捕り物劇になる筈だった連続主婦失踪殺害事件……。

「買つてきましたよー、弁当」

その若僧の名前は菊池聰。ちょっと今まで警察学校で勉強していた駆け出しのペーペーで、交番勤務から昇格し俺が勤めていた署に新米刑事として配置されたばかりだった。

「一体どこまで買いに行つてたんだ！　捜査も大詰めまで來てるの

に、いつまでもチンタラやつてんだよ！？」

「ヨシさん、俺だつて遊びに行つてた訳じやないつすよ？ ほら、美味そでしょこのメンチカツ？」

ちなみに『ヨシさん』つてのは俺の愛称だ。吉田だからヨシさん、ただそれだけだ。そんな事より、この若僧はまだ学生気分が抜けきつてなくて課長から無理矢理コンビを組ませた俺は何度となく捜査の足を引っ張られていた。まあつまり、定年間近のジジイに厄介な子守をみんなで押し付けてきたつて訳だ。

「寄り道してる暇があつたら飯を食いながらでもいいからさつさと今日の調書をまとめろ！ でないと今日も徹夜作業になつちまうだろ！？」

「……ちえつ、わざわざ足伸ばして美味いって評判の店まで買いに行つてきたのに、じゃあ俺一人で全部食つちまいますからね！？」

「勝手にしろ！」

確かに見た目や言動はどこにでもいるような頭の悪いクソガキだったが、仕事への熱意は人一倍あつた。それもそのはず、コイツの父親も地方の交番勤務をしていた警官で、連續殺人犯に襲われた妊婦を助ける為に身代わりにその凶刃に倒れた心優しい勇敢な人間だったのだ。

父親の様な強い人間になりたい、病気がちながら女手一つでこれまで育てくれた母親を助けてあげたい、そして何より凶悪な犯罪か

ら人々を守つてあげられる様な警察官になりたい、最近の若者にはない熱い正義感を胸に秘めた男だつた。

「うわー、このカツ、マジでうめー！ 母ちゃんの飯よいつめー！ こんな美味しいもん今まで食つた事ねーやー！」

「…………つたく、やれやれ…………」

元気良くカツと飯とおかずをかつ食べらつ若僧を半ば呆れて横田で見ながら、俺も毎晩の様に食つている海苔弁を喉に流し込み腹ごしらえを済ませた。俺には女房も家族もないので、これまでの人生弁当づくしだ。

この頃、俺達の署は謎の連続主婦失踪事件の捜査本部が設置されほとんどの刑事がこの事件の捜査についていた。しかし、もはや署のお荷物ジジイと化していた俺はこの若僧と共に現場で捜査をしてきた他の刑事達の捜査の内容を調書にまとめるという雑用に回され、慣れないデスクワークに肩が凝つっていた。

「何か、この前失踪した主婦が住んでたマンションにまた不審者情報があつたみたいですね、これって何か怪しくないですか？」

「…………だから何だ？ 不審者なんぞあちゅうからマンションや住民から通報があつただろ？ 課長の話だとこの事件の被疑者は大体絞ってきたという話だ、俺達がいちいち推理する必要など無い」

「でもこれヒディますよ？ 情報主の女性の特徴欄に『デブ主婦』って書いてありますよ、特徴は捉えてると思つけど、この調査をし

た人あんまりですよ？」

「トーリン事を喋っていないでさつと仕事をしろ！ 世間は休日でのんびりしてゐる日曜日くらい、せめて日が変わらない内に帰らせてく
れよ！」

何とか山ほどあつた調書をまとめ、頭も足もフラフラになつた俺は若僧を屋台に引きずり込んで酒を飲みながら数時間説教をたれた。半分やけ酒だった事もあつたが、早く帰りたいと言つていた本人がこの様、全くもつて情けない話だ。

帰り道、偶然あの不審者情報があつたというマンションの近くを通りになり、酒が入つて口頃の残業のストレスが溜まつっていた俺はつこでがしらにそのマンションを少し調べてみようと思ついた。

「おい若僧、今からそのマンションに行くぞ、監視力カメラぐらうついているだらうから、管理人に言つてビデオを確認するぞ！」

「ちょ、ちょっとヨシさん！ こんな間にマンションの管理人がいる訳ないぢやないつすか！？ 日が変わらない内に帰りたいって言つてたでしょ！？ 僕も母ちゃん心配してこつちに来ているるらしいんで、早く帰りたいですよー！」

「何言つてやがるこのマザコソ野郎！ 管理人が寝てたらこの経歷四十年の大ベテラン刑事であるこの俺が叩き起こしてやるから心配すんな！ ほら、さつさとついて来い！」

暗くなつたとはいえまだ蒸し暑い熱帯夜の中を千鳥足で歩いてその

マンションの前に到着すると、若僧の言う通りすでに管理人室の電気は真っ暗になつていて中に入気は無かつた。

「だから言つたでしょヨシさん？ 今のマンションの管理人なんてみんな派遣、住み込みなんて団地ぐらいですよ？ 絶対この時間じやいないつて思つてましたよ…」

「つるせえ！ お前は黙つて管理人室のポストに用件書いてさつさと入れてこい！ 明日また改めてここに来るぞ…」

「……質の悪い酔っ払いだなあ、母ちゃん、家で心配してないかな……？」

あの時俺は、酒のせいいかつい久し振りに若い頃みたいなやる気が出て空回りをしてしまったんだな。ところが、その俺の空回りは結果的には上手い具合に好転した。いや、今考えると好転とはとても言えない、決して触れてはならない最悪のシナリオの幕を開いちまつたんだが……。

「……ん？」

若僧の中に残し先に外に出た俺は、真っ暗な夜道に立ちこのマンションを見上げている不審な男の姿を見つけた。野球帽を目深に被り、フードの付いた灰色のパークーに白い汚れた作業服の様なズボン。まるで何か下調べをしている様な挙動不審な行動、どう見ても怪しい。

現行特に何かしている訳でもないし、俺も今は職務時間外だ。しかし、長年の勘からこれはとりあえず職場質問をする必要はあると判断した。俺は自分の顔を両手で叩き少し酔いを覚ませてから相手を刺激しない様にゆっくりと近づき、男に声をかけてみた。

「兄さん、こんな夜遅くに一人でビーチしたの？　ソニーのマンションの住人さんが何かかい？」

男は突然声をかけられて一瞬怯んだが、俺の顔を見るとまるで路上で車に轢かれた猫を見るかの様な嫌悪に満ちた目つきでこちらを睨んできた。

「ああ、悪いね、おじさんや、」「ううう者なんだけど……」

突然だった。俺が警察手帳を見せようとした瞬間、男がいきなりバイクのポケットから何か黒い物を取り出しこちらに押し当てるだけだった。

「……がつー？」

小型のスタンガンだった。体に高圧電力を流された俺はその場にうずくまり動けなくなってしまった。昔ならこんなもの反射的に取り押さえる事が出来たのだが、歳と酒のせいか対応する事が出来なかつたのだ。余りに不覚だった。

「……ち、ちくしょ、」

男は何も言わずに今度は別のポケットから刃物を取り出すと、何の躊躇いもなく俺の喉元に刃先を突き立てカツ切ろうとした。最近、人の命の尊さも知らずに残忍な犯行をする輩が多くなつたが、どうやらこの男もそんな人間の一人か。もはやこれまで、定年前に殉職とは情けない人生だ。死を覚悟したその瞬間、俺の真上を飛び越える人影が目に入ってきた。

「何やつてんだ、この野郎！？」

あの若僧、菊池だった。ヤツは刃物を飛び蹴りで弾き飛ばすと、男の体を掴んで一気に地面に投げ落とした。そして、男の手を捻り抑え込むと、モタモタしながらもワッパを取り出してその両手にかけた。

「どうですヨシさん！　俺だってやる時はやるんですよー！」

「……ああ、良くなつた、上出来だ……」

この時のコイツの活躍つ振りは、さすがの俺も認めざるを得なかつた。この若僧、将来必ず良い刑事になる。激痛が走り朦朧とする意識の中、俺は本気でそう思った。

「ここまで話なら良くある捕り物劇で済んだ。あ、せめてここで終わってくれいたら俺は何も思い残す事無くこの仕事を引退できただが……。

「……何か、取調べ室の外、人でいっぱいですよ？ もしかしてオレ達、出し抜いたんすかねえ？」

「これから取調べやるってのニヤニヤしてんじゃねえ！ それよつ、お袋さんがやって来るんだり？ 帰らなくていいのか？」

「何言つてんすか、これは俺とヨシさんの事件ですよ。ここはまちつちつと仕事をやりこなして、マザコンなんて活名返上してやりますよー。ぬひゃんもわつとわづわづですー。」

「よし、それでいい、しかし後で電話だけはちゃんとしておけよ、お袋さんを心配させる様な事をしちゃいけねえからな？」

若僧が公務執行妨害と殺人未遂で現行犯逮捕した男の名前は片山喜雄、三十四歳独身で署の近くの商店街で肉屋を経営していた。近所の主婦達には評判の店だったらしい、惣菜を買いにくる足が絶えたなかつたといつ。

どうやら捜査本部もこの男の事をすでにマークしていたみたいで、どの罪状で署に連行するか手段を悩んでいたらしい。そこに不審者の情報で立ち寄った俺達が先にヤツを捕まえた。つまり、先に取調べを行う権利があるのはこちら。若僧の言つ通り、俺達はまんまと本部を出し抜いた訳だ。

「……んで、お前さん、何であんな所でウロウロしてたんだ？　しかも、あんな危ねえ物持ち歩いて何をしようとしてたんだよ？」

取調室に入つてから三時間、男は俺の質問に全く答えようとはせずに黙秘し続けた。帽子を被つたまま下を向くその表情はあるで血が通つてないみたいに白く、感情が無いみたいに無表情だった。目は死んだ魚みたくドス黒く濁り、時折無意味に口元に笑みを浮かべる姿は少々気味が悪かつた。

「……何か、喋つてくれないかねえ……」

俺は何とかこの男に例の失踪事件の自白をさせたかった。なぜなら、俺をジジイ扱いして小馬鹿にしていた本部の後輩刑事達の無駄に高い鼻づばなをへし折つてやりたかったのもあるが、俺の命を救つてくれた若僧にこの事件の手柄を取らせてやりたからだ。

それに取り調べで相手に吐かせるのは昔からのおれの十八番でもある。どんなに歳を取つてお荷物扱いされようと、これだけはまだまだ若い者に負けない自信もあつた。

「……最近、お前さんがいたマンション近辺でうちの署が全くもつてお手上げの失踪事件が連続発生しててな、その天才的な犯行で俺達みたいな平凡な人間ではさっぱり理解出来ないんだ、そいつのお陰でこつちは毎日捜査でクタクタなんだよ、出来ればアンタのこの件くらい、楽に終わらしてくれねえかなあ……？」

「……お手上げ？」

俺が情けない弱音をポロリと吐くと、男が釣られて口を開いた。やはりそうだ、コイツは最近の凶悪犯に良くある自己顯示力の強いタイプの男。あの失踪事件と関連、いや多分、主婦達を拉致した張本人があるいは何か深い事情を知っている人間。しかも、大した動機も無く犯行を行っている愉快犯。俺の長年の捜査の勘はピンと反応した。

「……ああ、お手上げだよ、四十年刑事やつてる俺が言うんだから間違いない、白旗さ、下手すりや時効もの、もし誰がその失踪に関わっているなら、そいつは日本犯罪至上最高の天才犯罪者だよ」

「……至上最高か、ククク、良い響きだな、ククククク……」

ここまでくれば、後もう一押し。男の気味の悪い笑い声には腹が立つが、ここはグッと堪えなければ一人前の刑事にはなれない。俺は若僧の良い手本になる様に、冷静に男の自供を引き出した。

「……まさか、お前さんがやったのかい？」

「……知りたいか？ そんなに知りたいなら、教えてやっても良いぞ？ 品定めだよ、クソ女どもの品定めをしていたのさ、次の獲物のな」

「……三ツさん！ これって自供……ー？」

これだけ吐かせればもう十分だつた。やはりあの失踪事件、第三者による連續拉致事件だつたのだ。俺と捜査本部の予想は見事的中、この様な人間には嘘くさく感じるほど褒め千切つた方が意外と簡単に情報を漏らすものだ。しかし、今考えると最初からそれがヤツの目的だつたのかもしぬないが……。

「お前がやつたのか！？　いなくなつた人達はどうしているんだよ！？　みんな無事なのか！？　どうなんだ！？」

「落ち着け若僧！　お前はさつと本部の連中に連絡をして、例の件の逮捕状と男の自宅と店内の捜査許可状を取つてこい！」

男の自供によつて、署の中は一気に大騒ぎとなつた。男には改めて拉致監禁の疑いで逮捕状が出て、捜査官や鑑識が男の自宅や店内の捜索を開始した。この不可解な事件を引き起こした犯人の正体は掴んだ。しかし、逮捕から三日経ち、まだ男から失踪した主婦達の消息の情報は聞き出せない。ここから氣力の勝負、俺と若僧は取調室に籠もつて男と対峙し続けた。

「……最近の女達は、家事も子育てもろくにしないで自分達だけでスイーツだのセレブ気分だの抜かして高価な食い物に貪りつく、外で汗水垂らして働く旦那や育ち盛りの子供達には手のかからない安い惣菜を食わせて、ただ淡々と私腹を肥やしてブクブクと醜態を晒して……」

「……だから、お前さんは彼女達を拉致監禁したって言いたいのか？」

「ああ、そうだよ、醜い豚にはこの俺が神に代わって天罰を下してやつた、そうしないとこの世界が汚物で溢れかえってどんどん汚れていつちまうだろ？」

しかし、途端に饒舌になつた男の口から吐き出される話の内容は聞いていて反吐が出るくなるくらい悪意に満ちていて残虐なものだつた。口元をへの字にしてニヤニヤと笑う男と向き合つ俺達は次第に精神的にストレスを感じ始め、まともに食事が喉を通らない日々が続いた。

「……天罰つてお前さん、まさか彼女達を全員殺したのか？」

「わかつてないな刑事さん？ 殺したんだじやない、間引きだよ、『ま・び・き』、不必要に餌を食らつて採算の合わない家畜を処分してやつただけだ、誰もやりたがらない汚らしい雑用を俺は進んでやってあげたんだぜ？ 刑事さんも少しばかりの俺に感謝してくれよ？」

やはり、拉致された主婦達の生存は期待出来ない。残念だが、もうすでに全員この世には存在しないと断定していいだろう。しかし、だからと言つて彼女達を家族の元に帰さない訳にはいかない。何としても、四人の遺体がある場所をこの男の口から吐かせないといけない。

「……で、遺体はどこだ？　山にでも埋めたのか？　それとも海に沈めたのか？」

「……なあ、刑事さん、牛や豚などの質の悪い家畜の肉を見違えるほど美味くするスペイスって、何だか知ってるかい？」

しかし、肝心の拉致された主婦達の遺体の場所を訪ねるといつも必ずこの男は全然関係の無い話にすり替えてくる。この前は精肉加工場内での家畜のシメ方、その前は加工工程の詳しい説明、さすがに肉屋を経営しているだけ知識が豊富だが、聞いているこちらはあまりいい気がしない話ばかりだ。

「肉を美味くするスペイスはな、『恐怖』なんだよ、地獄の様な恐怖を味わう事によって大量の脳内部質が放出し、筋肉が一気に凝縮して良いサシが生まれるんだ、あとな、血の抜き方もコツがあつてな、首をかつ切つて逆さ吊りするのが一般的だが、少しづつゆつくりと抜いていくのがオススメだな、余計な油も良く抜けるし、体温の低下と薄れゆく意識の中で『死』の恐怖を存分に与えてやるのが

……

「いい加減にしろよてめえ！　こつちが先に質問してるんだぞ！？　お前に少しでも良心の呵責が残っているんだつたら、さつさと四人を隠した場所を吐いて帰りを待つている家族の元へ返してやれよ！？」

「オイ、若僧！　ここで焦つたら俺達の負けだ、黙つて座つてろ！」

「……でもー」

「菊池ー 我慢するんだ、我慢しNーー」

「……………」

男の胸ぐらを掴んで激昂する若僧をなだめて、俺はこのやつきれな
い気分を紛らわせようとタバコに火をつけた。その時、終始下を向
いて喋っていた男が初めて顔を上げて俺達の顔を見た。すると、何
かに気づいた様にニヤリと氣味の悪い笑みを浮かべ、いきり立つ若
僧の顔を舐める様に下から覗き込んだ。

「……菊池？ センの兄さん、そいつえばあの田曜日の田のお姉さ
ん……？」

「……田曜日っ！」

「ククククク、そつかそつか、アンタがそうだつたのか、これは予
想外の面白い展開になつたな、兄さん、アンタは良い母親に育てら
れたんだな、それなのに息子は仕事に夢中で、電話の一本すら連絡
しないとはね……」

「な、何の話だよー？ てめえと俺の母ちやんと、何の関係がある
んだよー？」

今も、後悔が残る。この時、男のこの言葉の意味に気づくべきだ
った。熱くなつた若僧を落ち着かせる為に取調室から外に出すべきだ

つた。この男から出来る限り遠くへ引き離すべきだった。アイツをこの事件の捜査から、すぐにでも外すべきだったんだ。

「……ミシヤん、ちよつと……」

取調室に顔を出した課長に呼ばれた俺は、若僧と男を置いて外に出た。俺を呼んだ課長の顔は真っ青に青ざめ、額にはびっしりと脂汗をかいていた。

「……ミシヤん、この事件は今から警視庁の管轄に移る事になった、今すぐこの事件の捜査から手を引き、大至急あの男の身柄を東京へ輸送するぞ」

「何だつて？　この事件は命懸けである男を捕まえた若僧の手柄だろ？　アイツはな、俺の命の恩人でもあるんだぞ！？　その手柄をお偉いさんが権力でもって横取りしようって言つのか！？　そんな真似、課長のアンタや署長が許してもこの俺が絶対に許さん！　この俺の定年までの残りのクビをかけても、この手柄だけは絶対あの若僧に……！」

「違うんだよミシヤん、そんな小さい話のレベルじゃないんだ！　この事件の真相は世間やマスコミに知られたらマズいんだよ！　ともうちの署の管轄だけじゃ扱いきれない、永遠に闇に葬らなきやいけない事件なんだよ！！」

男の店に捜索に行つた鑑識から、耳を疑る信じられない捜査結果が

報告してきた。男の店内の奥にある精肉を解体する作業場に、大量の人間の血液ルミノール反応が検出されたのだ。それだけではない、室内の機材に飛び散っていた肉片のDNA鑑定からも、それらが失踪した主婦四人のものと一致したらしいのだ。

「……ほとんどの肉片は、作業場にあるミキサーの中から検出されたんだ、しかも、それは四人だけじゃない、俺達の捜査には上がっていないもう一人の被害者のものが……」

「……もう一人？　しかもミキサーからって、まさか、彼女達の遺体の行方は……？」

俺の脳裏に、あの男の悪魔の様な笑みが浮かんできた。肉屋、ミキサー、豚、家畜、処分、そして男の言葉一つ一つ……。

「つぎやああああああ！」

突然、取調室から断末魔の様な叫び声が聞こえてきた。この声はまさか、若僧！？　男が何かやらかしたのか！？　俺と周りにいた刑事達は腰に巻いていた拳銃に手を当て、取調室の扉を開いた。

「若僧！　何があつた！！」

その光景は、見る者全ての思考と理性を奪い去った。椅子に座りヶ

ラケラと不気味な笑い声をあげる男の足元で、あの正義感が強く凜々しかつた若僧が自分の口の中に手を突っ込み、反吐を撒き散らしながら白田を剥いてのた打ち回っていたのだ。

「どひしたんだ若僧！　何があつたんだ！？　しつかりしる、オイ、菊池！…」

「ああ、あが、あがががあああああ…！」

その様子は尋常ではなかつた。田を血走せながら涙と鼻水を垂れ流し、突然立ち上がつたと思つたら髪の毛をグシャグシャに搔き乱し頭から倒れ、自分が吐いた反吐の上で再びのた打ち回る。その姿は明らかに精神に異常を来していた。

「「」のままじや舌を噉んじまつー、口の中に何か詰めりー。」

「暴れなつよつて手足を縛れ！　早く、救急車を呼ぶんだー！」

「「」めんなさこ、「」めん、「」め、「」じ、「」わや、「」わや「」わや
ああああああ…！」

まるで、「」の世の生き物とは思えない有り様だつた。取調室の中は反吐の悪臭と男の惡意に満ちた空氣で噎せ返り、とても人がまともにその場にいられる状態ではなかつた。

「お前、『イツに何をした！？ 正直に言えーーー』

「……だからや、正直に話してあげたんだよ、Jの兄さんの知らない真実を、日頃の感謝の気持ちを込めてね」

「……真実、だと？」

「刑事の仕事に就き毎日働きづくめの息子を心配して、田舎から上京してきたつて言う中年くらいの女性が俺の店に惣菜を買いに来たんだよ、『栄養のある物を食べさせてあげたい』ってね、彼女は俺の天罰の対象になる様な醜い体型じゃなかつたが、優しさで満ちた雰囲気が俺の死んだ母親にも似ててつい興味をそそられてしまつてね」

机の上には、肌の色が真っ青に変色して痩せ細つた女性が椅子に縛られているのを写した男の携帯電話が置いてあつた。それは以前、若僧が俺に写真を見てくれた母親の変わり果てた姿だつた。彼女の両足首はバツサリと切断されていて、その床にはおびただしい程の大量の鮮血が広がつていた。

「そんな母親の優しさをちつともわかつていないこの兄さんに、心暖まるお話とあの日曜日の真実を教えてあげただけだよ、『あの日の仕入れ品はこちらになります、毎度お買い上げありがとうございます』ってね」

俺に胸ぐらを掴まれながらも、男はこの光景を楽しむ様にケラケラを笑っていた。近所の商店街の肉屋、見つからない遺体、そして肉

片が付いていたミキサー。俺の頭の中によぎった立ち眩みそうな身の凍る悪夢の真実。そつ、あの夜夕飯に若僧が食べていたもの……。

「醜い豚共じや肉質が悪くて不味いだろうから、俺が手塩にかけてスペイスを効かせた最高ランクの上質品を使って調理してやつたのさ、なあ兄さん、栄養も愛情もたっぷりで美味かつたろう? あの

『メンチカツ』

それから一ヶ月後、あの若僧、菊池は入院した精神科の病院を抜け出し、近くの森の中で首を吊っているのを発見された。絶望の淵をさまよい歩き、もがき苦しみ、自分の行ってしまった禁断の行為に耐えられなくなつたアイツは最期に自らの命を絶つてしまつたのだ。一人身だつた俺からすれば息子の様な存在、そして命を救つてくれた恩人を亡くして今思う。あの時あの取調室で男と二人きりにさせなければこんな事にはならなかつた。せめて、あの夜にアイツに弁当を買いに行かせなければ、あるいは母親が上京してきた時に真っ直ぐ家に帰らせていれば……。

あまりの残忍な犯行内容とあの店で食材を買った不特定多数の『被害者達』の混乱を避ける為、この事件には報道規制がかかり関係者だけが知る禁断の事件簿となつた。もちろん、俺もこの話は誰にも話さずに墓場まで持つていくつもりだ。

『ヨシさん、食べないんですか? このメンチカツ』

寝ると必ず夢を見る。アイツの夢だ。あの若僧が笑っていた姿が、元気良く検査に走り回っていた姿が、そして美味そうに飯を頬張つていた姿が、俺の脳裏に焼き付いて離れない。

もう、出来る事ならばこの記憶は頭の中から消してしまいたい。もう一度と、あの日の事を思い出したくない。なのに、毎晩アイツはやつてくる。そして笑ってる。笑って俺の事を見ているんだ。

「何で、俺なんかが生き残っちゃったんだ……」

最近、夢を見るのが怖くてまともに寝る事が出来ない。食事も喉に通らない。生きていくのが辛くなってきた。疲れたよ、頼むからもう許してほしい。なあ、教えてくれ。俺はこれから先、どんな面をして生きていけばいいんだろうか。

そして、俺はこれから死ぬまでずっと、絶望の中で罪悪感と嫌悪感に苛まれながら、お前の夢を見続けていかなければならないのだろうか……。

何もない、真っ白な空間。真っ白い服を着た女性が一人、そこに立っていた。

そして、彼女の目の前には同じ真っ白な服を着た女性が一人、こちらを向いて立っている。

「……あなたは、一体誰なの？　どうしていつも私の前に現れるの？」

彼女が問い合わせても、女性は何も答えない。その顔はまるでモザイクがかかつた様にぼやけて良く見えず、一体誰なのかわからない。

「お願い、答えて！　どうしてあなたは私の事をこんなに苦しめるの！？　あなたは、あなたは一体……」

すると、次第に女性の顔は彼女が一番見慣れている人物の顔に変わり、瞳からは涙を零していた。

しばらくするとその大粒の涙はみるみる内に真っ赤に変色し、両目から滝の様に流れ落ちて女性の顔全体を赤く染めていった。

「……いや、そんなのいや、やめて！…」

女性の顔は風船が萎んだみたいに急激に痩せ細り、顔の肉は真っ赤な液体となつて目や鼻の穴や耳、口から大量に吹き出した。そして、ビデオの早送りの様な残像で頭を振り乱し苦しみ出した女性の髪は真っ白に萎れバサバサと抜け落ち、目からも眼球が抜け落ちてミイラ化していく。

そんな状態になつても、女性は怯えて後退りする彼女にひたひたにじり寄り、その両肩を真っ赤に染まつた両手で掴みもたれ掛かった。

「……お願い！ 誰か、誰か助けて！…」

その手から逃げ出そうとしても、女性の手は彼女を掴んで離さない。恐怖に震え、半狂乱になる彼女を嘲笑う様に女性の顔からは突然炎が上がり、その火は一気に体全体を包んだ。

肉が抜け落ち、骨にへばりついていた皮膚は異臭を発しながら口ドロドロと溶け出し、いつしかその姿は骨だけになつた。

「キイイイイイイイー！」

鼓膜を突き破られる様な断末魔の叫び声を上げ、真っ黒に燃え尽き女性は崩れ落ちていつた。

その炎はついに彼女にも燃え移り、あつといつ間に体全体を包んで全てを燃やし尽くしていく。体も、感覚も、記憶も、精神も、彼女

を回るもの全てを……。

「……アタマガ、イタイ……」

『……中村? おい、中村! ?』

「……えつー?」

「どうした中村!? しつかりしるー?」

気がつくと、彼女の前には眼鏡をかけた一人の男性がいて、心配そうに両肩を掴んで体を揺すっていた。

我に帰った彼女が周りを見渡すと、そこはいつも見慣れた自分の職場、ナースステーションの室内だった。

「酷くうなされていだぞ、どうした? しかも勤務中に居眠りをするなんて、顔色も悪いぞ?」

「……す、すみません……」

彼女はこの病院の精神科閉鎖病棟に勤務する看護士。まだ半年のキャリアしかない新人ナースだが、どの患者に対しても笑顔で看護に

あたる勤務態度は同じ看護士仲間や医師達からの評判が良く、信頼されていた。彼女を心配して起こしてくれたこの医師もその中の一人である。

「……また、あの夢を見たのか？」

「……はい……」

「その様子だと、家でもしっかりと睡眠が取れていないみたいだな

……

しかし、彼女には一つ悩みがあった。病院の仮眠室でも一番落ち着くはずの自分の部屋でも、夜でも昼でも、例え疲れていて眠い時でも、寝ると必ず先程の様な意味不明の恐ろしい悪夢を見てしまうのだ。

顔の見えない謎の女性が目の前に現れ、彼女の目の前で常識では考えられない奇怪な行動を起こして彼女に迫つてくる。

そして、目覚めた後には必ず頭が引き裂かれそうな酷い頭痛が彼女に襲いかかる。その痛みは、とても立っている事が出来ない程の激痛。

「私が処方した薬はちゃんと飲んでいるのか？ それでもまだ、悪夢も頭痛も治まらないのか？」

「……はい……」

「……うーん、医者と言つ立場からすれば興味深い病状だが、本人

からすればたまたまではないな……」「

そんな夢を見るようになったのは一ヶ月くらい前。病院での勤務中に疲労で倒れ、救急室に運ばれ治療を受けてからの事だつた。

最初はただの夢だと思っていた彼女も、毎日の様に襲いかかってくる悪夢に次第に恐怖を感じ始め、なんとか仕事をこなしながら当時看病をしてくれたこの男性医師の診察を受ける事になつたのだ。

「……これはあくまでも私の見解だが、その悪夢の原因は疲れと共に君の鋭い感受性と関わっているのだろう、君が様々な患者と関わる事によって、知らぬ間に彼らの感情や思考が何かしらの形で君の脳神経に働きかけ、その影響がその夢となつて君の目の前に現れているのだと思う、きっと頭痛もそれによる脳の疲れからだろう」

「…………はあ…………」

「君の真面目な勤務態度は私も素晴らしいものだと思つてゐる、しかし、この科では懸命になるばかりに自身までもが精神を病んでしまつた医師や看護士達の過去の例もある、少し気をつけた方が良いぞ」

「…………でも、それは私の選んだ道ですか?」

「そうだ、少し仕事を離れてストレス発散にゆっくりと旅行にでも出掛けたらどうだ? 環境が変われば気も晴れて少しは気持ちも改善に向かうだろ? 今はあまり深く考え込まないのが一番だ」

男性医師の言いたい事は良くわかっている。しかし、過度のストレスや疲れから来るものとは何か違う、得体の知れない何かが脳内に侵入して、それが意図的にあの悪夢に出てきている様な……。自分が自分でなくなってしまいそうな不安、何か大切なものを壊されていく様な恐怖。何とも説明の出来ない不快な感覚が彼女の頭の中を支配していた。

「とにかく、今は投薬治療を続けてしばらく様子を見よう、頭痛が酷い時は無理せず薬を飲んで、眠たい時は夢を見る事を怖がらずにちゃんと寝る事だ、いいな?」

「…………はい…………」

「今日は夜間当番らしいな? 私はこれで帰らせて貰うが、他の当番と交代に休憩を取つて絶対に無理をするんじゃないぞ? 私からも婦長に話しておくから、近い内に長い休みでも取つてゆっくりしなさい」

「…………はい先生、どうもお疲れ様でした…………」

医師はそう言つと部屋を出て行き、ナースステーションの中は彼女一人になつた。悪夢をうなされていたせいか彼女の額にはびっしりと脂汗が浮かび、白衣の下に着たシャツの背中部分は汗で濡れて冷たくなつていた。

病棟の廊下の窓越しから見える外はすでに真っ暗。彼女が時計を見上げると、時間はすでに深夜十一時を回つている。そろそろ各病室の見回りに行かなくてはいけない時間になつていた。

「……気持ち切り替えなきや、仕事、仕事……」

医師から処方された真っ赤な色をした頭痛薬を一錠水で喉の奥に流し込み、彼女は机の上にある懐中電灯を手に取った。ナースステーションの扉を開けて廊下に出ると、まるで人が誰もないみたいに物音一つ無く静まり返っていた。

こんな夜中でもたまに寝付けずに暴れ出す患者もいたりするのだが、今日は恐ろしい程に静かだった。今まで経験の無い程の静けさに、彼女は少し不安を感じていた。

「……えつ？」

病室を覗いた彼女は目の前の光景に驚愕した。病室で眠っているはずの患者達の姿が消えてしまっていたのだ。隣の病室も、次の病室も、そのまた次の病室も誰一人いなくなっていた。

「……何で？　どうして…？　あの子は、の人達はどこに行つてしまつたの！？」

少しずつ彼女に心を開き始めてくれていた自閉症の少女や自殺願望を抱きながらも彼女の懸命な看護で次第に回復の兆しを見せていた男性患者の姿が無い。

そして、痴呆症が進みまともに会話が出来なくなっていたにもかかわらず彼女には満面の笑顔を見せてくれていた老婆の姿も消えてい

た。

日々の激務で疲れきっている彼女の、唯一の心の支えだった全ての患者達の姿が全ての病室から消えてしまっていたのだ。

「……そんなバカな！ どうして、一体どうして！？」

まさか、自分が居眠りをしてしまっている間に病棟から外へ出て行ってしまったのか？ いや、そんな訳がない。病棟と外を繋ぐ入り口の扉の鍵はちゃんと閉まっていた。誰も出ていった形跡なんて無かった。

それに、さつきまで他の看護士やあの男性医師もここにいたのだから、十人近くいた患者が突然全員いなくなっていたら今頃病院内は大騒ぎになっているはず。

「……じゃあ何で、何で誰もいないの！？ 一体、何が起こっているの！？」

理解不能の状況に、彼女はすっかり混乱してしまっていた。慌てふためき病棟内を駆けずり回つていると、突然酷い頭痛とキューと黒板を爪で引っ搔く様な不快な耳鳴りが彼女に襲いかかってきた。

「……痛い……、何で？ 今さつき薬を飲んだばかりなのに……？」

……ドスン！

「……誰！？」

真っ暗な廊下の一一番奥にある病室から、何やら物音が聞こえてきた。その音は何かが床に転げ落ちた様な衝撃音だった。そしてその病室は、現在誰も入院していないはずの空き病室。彼女は恐る恐るその病室を覗き込み、室内懐中電灯を照らした。

「……ヒッ……！」

すると、そこには頭を残した体全体を白い布で包まれ、無数の縄で動けない様に縛られてた人間がベッドから落ちて床に横たわっていた。

黒く長い髪が顔全体を覆い、体の大きさからすると女性の様だった。しかし、彼女はこの様な患者は今まで病棟内で見た事が無かつた。明らかに、そこにいるはずの無い存在だった。

「……あなたは、誰？ 誰なの……！？」

女性のその異様な姿を見た彼女は恐怖のあまり手に持つていた懐中電灯を下に落とし、腰を抜かして床にヘナヘナと座り込んでしまった。

すると、その懐中電灯を落とした物音に反応したその女性は、まるで芋虫の様にズリズリと体を捻らせながら彼女の足元に近づいてい

つた。

長い髪を床に垂らし、顔を床に擦りつけながら彼女に真っ直ぐ向かつてくるその姿は氣味が悪く奇妙で、とても人間の動きとは思えないものだった。

「……い、いやー 来ないで、こちに来ないで…」

腰を抜かした彼女は立ち上がる事が出来ず、尻餅をついたまま後退りをして逃げようとした。しかし、足が震えて上手く動かない。まるで氷の上にいるみたいに手足が滑り、そこから逃げる事が出来なくなつてしまっていた。

「……フウー、フウー……」

女性の姿が近付いて来ると同時に、獣の様な唸り声が聞こえてくる。恐怖で叫ぶ事も出来なくなつた彼女は、ついに女性に追いつかれそのまま上に覆い被さられてしまった。

彼女の体に被い被さる長い髪の隙間から覗き込んでくる身の毛のよだつ恐ろしい視線。その顔はあの悪夢の中で現れる、あの女性の顔だつた。

「……お願い、もつやめて、誰か助けて……」

「キイイイイイイー！」

「いやああああああ！」

再び鼓膜を突き破られそうな叫び声の後、突然女性の頭は木つ端微塵に飛び散り大量の血と脳みそと思しき無数の肉片が彼女の顔に降りかかった。そして、彼女の額からも血が吹き出し、ミシミシと頭蓋骨がひび割れる音が聞こえてきた。

「……頭ガ、アタマガワレルウ……！」

『中村？　おい、中村！？』

えつ?

「おい、しつかりしろー!? 何を急に暴れ出してこらるんだー!? 落ち着けー!?

「…………？」

我に帰つて周りを見渡すと、そこは先程の病室ではなく灯りの点いた診察室の中だつた。彼女は床に寝そべつているところを多数の看護士達に押さえられ、田の前にはあの男性医師が顔を覗き込んでいた。

「……あの、ここは？ 私は一体……？」

「何を言い出しているんだ？ この前夜勤中にまた倒れて、しばらく仕事を休んで診察の為にこの病院に通院して来たんだろう？ 診察中に突然暴れ出して、それに自分の足でここまで歩いて来たというのに、何も覚えてないのか？」

男性医師の言う通り、彼女はそれまでの事を何も覚えていなかった。覚えていないと言つよりも、自分が倒れた事や仕事を休んでいる事、あの病室で白い布にグルグル巻きにされた女性に襲われてからの記憶がスッポリと抜け落ちてしまっていたのだ。

それどころか、診察室の鏡に写る自分の顔を見るといつの間にか目の下にはどす黒い隈が出来て、肌の色は青ざめ頬の肉はげつそりと痩けていた。まるで別人の様な自分の顔に、彼女は驚きを隠せなかつた。

「……これが、私？ どうして？ 一体どうして……？」

「……かなり病状は悪化しているみたいだな、この様子だと記憶障害も引き起こしているみたいだし、入院治療も考えた方が良いな、次回の診察の時は必ず誰か家族の人と一緒に来るよう、これから の治療について話し合わなければならぬだろ？」

「……入院？ 先生、私は一体どうしてこんな事に……？」

「それと、この前から処方している薬は必ず毎日飲み続けなさい、仕事の事は考えないで、今は自分の病気を治す事を心掛けなさい、

いいね?」

「……は、はい……」

全く理解出来ない現実に疑問心を苛まれながら、彼女は処方された薬を受け取り病院を後にした。

一体、自分は倒れてから何をしていたのだろう? どうやってこの病院までやつて来たのだろう? あの時、一体何が……? 記憶の糸を辿つても、彼女は何一つ思い出す事が出来なかつた。ただ果然と、うつすらと覚えている帰り道を辿つていくしか出来なかつた。

「……陽子ちゃん、お帰りなさい?」

「……ただいま……」

家に帰ると、母親が心配そうに彼女を出迎えた。優しい母親の姿と聞き慣れた声、そして生まれた時から変わらない自分の家の玄関。安らげる光景に辿り着いた彼女はそれまで抱いていた疑惑から少し解放され、やつと落ち着きを取り戻した。

「……先生が今度ね、家族の人を連れてきなさいって……」

「いいのよ、詳しい話は後で聞くわ、今日はもう部屋に戻つてゆっくりと休みなさい?」

「……うん、ありがとう、お母さん……」

とりあえず、今は余計な事を考えない方がいいのかもしれない、自分は今病気にはかかっているんだ、先生の言う通り治療に専念しよう。自分なりに疑問に決着をつけ、処方された薬を一錠飲んだ彼女は自分の部屋に戻りベッドに横たわった。

「……仕事を休むなんて、同じ看護士の人達や患者さん達には迷惑をかけてしまったな、元気になれたら絶対にお詫びに行かなきゃ……」

横になつて目をつむつた彼女は次第に眠りについていく意識の中で仕事仲間や患者達の事を思い出していた。

激務の中、お互いを支え合つて頑張ってきた先輩看護士達、懐いてくれた自閉症の少女、退院してからの夢を熱く語ってくれた鬱症状の男性、本当の孫の様に接してくれたあの老婆……。

「……あれ……？」

眠りの縁で、彼女は自分の記憶の異常に気付いた。毎日病棟で顔を合わせていた看護士や、名前も血液型も全て覚えていたはずの患者達の顔が一人も思い出せない。まるで顔全体にモザイクがかかっているみたいに記憶の中でおぼろげ、誰か誰なのかわからなくなつてしまっていたのだ。

「……何で、どうして！？　どうして何も思い出せないの…？　あんなに親しくしていたのに、どうして誰の事もわからなくなってしまったの…？」

訳がわからず平常心を無くした彼女は、ベッドから飛び起き部屋の扉を開けて居間にいる母親の元へ助けを求めて駆け寄ろうとした。するとなぜか、扉の外の光景は真っ暗な森の中に変わっていて、今いたはずの部屋の扉も姿を消してしまっていた。

森は空が見えないくらいに天井を覆い尽くしていて、木々の隙間からは大量の雨が降り注ぎ彼女を濡らした。

「……何で？　どうして？　ここはどこなの…？　何で私はこんな所にいるの…？　……いや、助けて、誰か助けて…！」

次々起ころる不可解な現象に錯乱した彼女は、得体の知れない恐怖感から逃げるように森の中を疾走した。

裸足で走る彼女の足には枯れ落ちた枝の破片が何本も突き刺さり、木々を掻き分ける腕も切れて傷だらけになつていった。

「……わからない、わからない！　もう何が何だかわからない！　お父さん、お母さん、先生…！　誰か、誰でもいいから助けて…！」
「こから出して、お願ひ…！」

足元の木の根に躡いた彼女はそのまま前に倒れ込むと、痛みと疲労で力尽きその場で泣き崩れた。雨は更に激しさを増し、森全体には雷鳴が響き渡つた。

「……どうして？ 何でこんな日に会わなきやならないの？ 怖い、寒い、苦しい……、お願ひ、誰か……」

すると、懇願する彼女に手を差し伸べる様に上から一本の紐が垂れ落ちてきた。彼女は最後の力を振り絞り、藁をも掴む思いでその紐を掴んで思い切り引つ張つた。

バサバサバサツ！！

すると、その紐に連動する様に近くの茂みから何かの影が上に引き上げられた。そして、その影は高い木の枝まで到達すると、風に吹かれている様にブラブラと揺られ始めた。

「……い、いやあ、いやああ！－！」

その影に釣られて森の上を見上げた彼女は絶叫した。そこには木々の枝にびっしりと隙間なく大量の人間が紐で首を吊つっていて、体中には無数の刃物や金属が突き刺さり、空から降つてくる雨を血で真っ赤に染めていた。

「……いや、いや、いやあ！ もうやめて、もうやめてぇーーー！」

その地獄の様な光景から何とか逃げ出そうとした彼女の上に、何か重たく正体不明のものが上から落ちてきて覆い被さった。恐怖で錯乱状態になつた彼女がその落ちてきたものを振り払おうと必死で両手を振り回すと、指先に何か糸の様なものが絡んでくるのを感じた。

「……何、これ……？」

再び雷鳴が響き、森全体が明るくなつたその瞬間、彼女はそれを見てしまった。手に絡まる黒くて長い女性の髪の毛と、上から落ちてきたもの正体を。

「……そんな、また……、いやあ、嫌だあ……！」

落ちてきたものは先程自分が紐を掴んで引き上げたあの女性の顔をした人間の体だった。

首には何重にも紐が巻かれて肉に食い込み、頭には多数の刃物が突き刺さり頭蓋骨が割れて中から脳みそが飛び出していた。

腹部も鋭い金属片でぱっくりと裂け臓物が垂れ下がり、体中の皮膚は真っ青に変色して所々が腐乱していた。

……ケラケラ、ケラケラケラケラ……

木の上で首を吊っている人間達の目は一斉に彼女を睨みつけ、不気味な笑い声を上げながら左右に大きくブラブラと揺れ始めた。振り子の様に揺れる人間達の首はその勢いに耐えられず、ブチッと千切れでは次々にドサドサと下に落ちていった。

「……ツギハオマエ、ツギハオマエ……！」

人間のものは思えない得体の知れない恐ろしい声と共に、またも不快な耳なりと酷い頭痛が襲いかかり彼女の言動の自由を奪つた。すると、息絶えていたと思っていた女性が自分の頭に刺さっていた刃物を引き抜き、動けなくなつた彼女の側頭部にその刃を突き刺した。

頭を切り裂かれた彼女の脳に女性の頭の中から出てきた神経の糸の様なものが絡みつき、彼女の思考、記憶、人格そのものを浸食し支配していく。

「……頭ガ、アタマガア……！」

『中村？　おい、中村！？』

「……えつ？」

「しつかりしろ中村！？ 私の声が聞こえるか、中村！？」

「陽子ちゃん！？ お母さんよ、わかる！？」

「……また、夢……？」

聞き慣れた母の声と男性医師の姿。我に帰った彼女が周りを見渡すと、先程の森も死体も女性の姿もいなくなっていた。

窓から木漏れ日が差す真っ白な病室の中、彼女はいつの間にか真っ白なパジャマを着て家族と医師と看護士達に囲まれてベッドの上に寝そべっていた。

「陽子ちゃん、もう一人で苦しまなくていいのよ？ これからはこの病院に入院をして、お母さんと一緒にゆっくり病気を治していきましょうね？ お母さん、ずっと陽子ちゃんの側にいてあげるからね？」

「……お母さん？ 入院つて、いつ……？」

「覚えていないかもしないが、君は自分の部屋で突然暴れ出して倒れて救急車でここに運ばれたんだよ、でも、もう大丈夫だ、これからは毎日この病院で私が君の治療に専念させてもううから、もう心配しなくていい」

「……先生……？」

「陽子ちゃん、もう悪夢は終わったのよ? これからは陽子ちゃんの病気を先生方が色々研究して助けて下さるから、これ以上怖い思いをしなくて済むのよ?」

「少し落ち着いた様だね、君の病気は必ず治してみせる、さあ、薬を飲んでもう一休みしなさい、もう君は苦しまなくていいんだからね」

「どうか、私は助けて貰えたんだ、もうあの悪夢を見なくて済む様になるんだ、もうあの怖い女性の姿を見る事はない、もう眠る事に怯えなくともいいんだ……。」

母親と男性医師の暖かい励ましに、彼女はやっと未知の恐怖から解放された気分になつた。薬と共に水を一口飲み込みホッとした彼女の瞳から、自然と安堵の涙が溢れてくる。

「…………ありがとうございます、お母さん、ありがとうございます、先生…………」

しかし、悪夢は終わつてなどいなかつた。彼女が涙で潤む瞳をタオルで拭いて母親と医師の姿を見た次の瞬間、彼女の頭の中に巣くう悪魔は最後の絶望的光景を叩きつけてきた。

「…………えつー?」

彼女の視界から、母親や医師や看護士達の顔がまるでのっぺらぼうの様に消えてしまつっていた。目に写る全ての人間の顔が誰だかわか

らない。

顔や名前どころか、その人間との関係や思い出、全ての記憶が彼女の頭の中から消えてしまっていたのだ。

「……何で、どうして！？　あなた達は誰？　一体誰なの！？」

「中村？　おい、どうしたんだ中村！？」

「陽子ちゃん、お母さんよ、わかるでしょ？　しつかりして！？」

「……わからない、わからないわからない！　みんな誰なの！？　どうして私はここにいるの！？　一体、私はどうなっちゃったの！？　？　お願い、誰か、誰か助けて！！」

錯乱する彼女に、またしても強烈な頭痛と酷い耳鳴りが襲いかかってきた。その痛みは今までのものよりも一段と激しく、まるで鋭利なドリルで頭の四方八方を突き刺されている様な酷い痛み。頭の脳細胞をグチャグチャに破壊される様な耐え難い激痛と異常なほど吐き気をもよおす不快な感覚。見える全ての映像が渦を巻いて歪み出し、彼女自身を保っていた『何か』が頭の中で次々と破壊されていくを感じた。

「……私が、壊レテイク……！」

「ちよつと陽子ちゃん、どこに行くのー？」

「出歩いたら危険だ！　病室から出るんじゃない、中村！？」

医師や看護士の制止を振り切り、病室を飛び出した彼女は逃げ込むように廊下のトイレの中へと入り、そのまま入り口にある洗面台に倒れ込んだ。

強烈な頭痛に溜まらず嘔吐した彼女がゆっくりと頭を上げると、そこには今までずっと夢の中で自分を苦しめ続けてきたあの女性の姿があった。

「……あなたは、一体誰なの？ ビビしていつも私の前に現れるの？」

その女性も、彼女に向かつて何やら大きく口を開けて訴えてくる。しかし、その声はなぜか聞こえてこない。何度呼びかけても、女性は彼女と同じ行為を繰り返すだけだった。

苛立つた彼女は大粒の涙を流しながら両手の拳を力一杯ドンドンと女性に叩きつけ、ありつたけの大聲を振り絞つて叫んだ。

「お願い、答えて！ どうしてここまで私の事を苦しめるの！？
あなたは、あなたは一体……」

すると、女性の顔全然に無数のヒビが走りその姿が歪んだ。それと同時に、彼女の手のひらが切れて血が滲み出し、女性の全身が真っ赤に染まつていった。

「……！」

そして、彼女は気づいてしまった。自分の前にいる女性の正体は鏡に写っている自分の姿。夢に出てきた女性の顔は、彼女が一番良く知っている自分自身の顔だったのだ。

「……いや、そんなのいや、やめて……」

信じがたい事実に気づいてしまった次の瞬間、彼女が流す涙も鏡に写る自分と同じ様に真っ赤に変色し、次第に体中の肉体が腐つて崩れ堕ちていく感覚を覚えた。

「……お願い！ 誰か、誰か助けて！！」

彼女の全身からは大量の血と溶け出した肉が吹き出し、長い髪もバサバサと抜け落ちていく。トイレの白い室内は真っ赤に染まり、彼女は枯れ果てた喉で苦しみの声を上げた。

「キイイイイイイー！」

その声は、とてもこの世のものとは思えない断末魔の叫び声。彼女を苦しめてきた、あの耳鳴りの音と同じものだつた。

そして、最期は顔からは突然炎が吹き出し、一瞬にして体中は火に

包まれ、彼女は真っ黒に燃えぬき崩れ堕ちていった。

「……アタマガ、イタイ……」

『中村？　おい、中村！？』

「…………」

「……反応無し、か

「」はある精神科閉鎖病棟の一一番奥に特別病室の一室。男性医師がある患者の問診を行つていた。

何もない真っ白な病室の中で、暴れ出さない様に白い布に包まれ体中を紐で縛られた女性が一人、ベッドに横たわっていた。

医師が呼び掛けるものの、返事は無くただヘラヘラと不気味な笑みを浮かべているだけ。手をかざしても、その目からは何の反応も感じじる事が出来なかつた。

「……先生、陽子は、陽子は一体どうなつてしまつたんですか？
あの子は元に戻る事が出来るんですか？」

「……どうやら、完全に精神が壊れてしまつたみたいです、この様な状態になつてしまつた患者のケースは他にも見られ、私達も医療

を通じて日々心理学研究を進めていますが、実験上効果的な治療法となると難しいのが現状で……」

「…………そんな…………」

「でも、決して諦めないで下さい、私達で全力を尽くして治療にあたりますし、それによって次第に彼女の病状も改善していくかもしません、その時は、彼女には何よりご家族のお力添えが必要になるのですから…………」

「…………ああ、陽子、陽子ちゃん…………」

変わり果てた彼女の前で泣き崩れる母親を病室に残し、男性医師は研修中の女性医師を従え次の病室へと向かつた。

「…………あの様な患者には手厚い治療を施すのはもちろん、医学がまだ解明出来ていない病状に対しても新たな心理療法を生み出す為の臨床実験体としても利用出来る、様々な患者と接して日々の医療知識を高めていくのも医師の仕事だ、良く覚えておく様に」

「…………」

患者の壮絶な病態にショックを受けた女性医師は、辛うじて顔を歪めながら手で頭を押さえていた。

「どうした？　頭が痛いのか？」

「……はい、最近研修続きで寝不足で、眠れても何か嫌な悪夢を見るようになつて……」

「…………うむ、これはあくまでも私の見解だが、その悪夢の原因は疲れと共に君の鋭い感受性と関わっているのだろう、君が様々な患者と関わる事によって、知らぬ間に彼らの感情や思考が何かしらの形で君の脳神経に働きかけ、その影響がその夢となつて君の目の前に現れているのだと思う、きっと頭痛もそれによる脳の疲れからだろう」

そして、男性医師はうなだれる女性医師の肩に手をかけ、優しく微笑み語りかけた。

「今度、良く効く薬を処方してあげるから飲んでみると良い」

It's fine day

It's a fine day.
People open windows.
They leave their houses.
Just for a short while.
They walk by the grass.
And they look at the grass.
They look at the sky.

It's going to be a fine night.
It's going to be a fine day to
morrow..

ある晴れた穏やかな午後の日、金色に輝く広い草原に幼き我が子の手を引いた女性が美しい声で歌を口ずさんでいた。

『お母さん、そのお歌は何のお歌なの?』

『このお歌はね、神様に捧げるお歌なのよ、お母さんはこのお歌が大好きなの、坊やはこのお歌が嫌い?』

『ううん、僕もそのお歌大好き! だつていつも僕が寝れない時にお母さんが聞かせてくれるお歌なんだもん!』

『 そうね、坊や、あなたは神様が唯一お母さん達に許してくれた大切な贈り物なのよ、とても愛しているわ、私の坊や……』

L a l a l a l a , i u l u l u l u . . .

その澄み切った歌声はいつまでも、心地良い風と共に少年を包み込み見守り続けたといつ……。

.....ジリココリ、ジリココリ.....

「はい、もしもし?」

「 ジョセフか? 僕だ、ジャンだ」

「ジャン? 何だよ、こんな夜中に.....」

酷い土砂降りの音が部屋中にも響き渡る真夜中、俺は親友のジャンに呼び出され家の前まで来ていたヤツの車に駆け足で近寄り、雨から逃げる様に助手席に飛び乗った。

熟睡しているところをたたき起されたもんだから頭が痛くて堪らない。俺は濡れたコートをグシャグシャに丸め込むと後部座席に投

げ込み、不機嫌な面をしてタバコを取り出してライターで火をつけた。

「オイオイ、俺がタバコ吸わないの知ってるだろ？ 車の中は禁煙だぞ！」

「うるせえな、こんな夜中に呪き起こしておいて文句言つてんじゃねえよ！ いつもいつも自分の健康ばかりに気を使いやがって、気持ち悪いヤツだな」

「小さい頃から母さんに健康には人一倍気をつける様に言われ続けてきたんだよ、タバコなんてもつての他だ、頬むから吸うなら降りた後にしてくれよ」

「……また『母さん』かよ、いい加減下りねえ……」

ジャンは学校で知り合つた頃からヤケに健康に気を使つてゐる若干オツムの弱い変わり者だ。タバコや食べ物にケチをつけては、いつも『母さんが、母さんが』と言い出すマザコン野郎。その度毎回付き合わされる友人の俺はいい迷惑だ。それくらいで死ぬ訳でもないのによ……。

そんなジャンが突然こんな時間に俺を呼び出した理由も、もちろん母親絡みの件だつた。ジャンは数年前から進学の為に、田舎の実家の親元から離れて都会で生活を始めてゐる。それからというもの、寂しさのあまり毎日電話で家族と連絡を取つていたらしいのだが……。

「……一週間前から、急に電話に出でくれなくなつたんだ、手紙を送つても返事が返つてこないし、母さんはこの頃病気がちで寝つきの生活らしいから何か心配だし……」

「でも、親父さんはまだ元気でピンピンしてんだろう。電話や手紙に気づかなかつただけだつたんじゃないのか？ 何もそれくらいの事でこんな雨の中俺まで連れて様子を見に行く事も無いだろう？」

「それだけだつたらこくら俺だつてこんな行動起こさないよー。心配で寝れなくなつてたら、わざ突然父さんから電話がかかつて来たんだよー！」

「何だよ、無事なんじゃないか？ だつたらいちいち見に行く必要も……」「

俺が落胆して座席にうなだれると、ジャンは大真面目な顔をして激しく首を横に振つた。その顔には余裕が無く、今にも泣きそうな顔をしている。

「それがおかしいんだよ！ しばらく黙つたまま何も言わないと思つたら、いきなり『お前達にはすまない事をした、母さんと共に旅立つのを許してくれ』って言い出してそのまま電話を切つちまって、その後何度も電話をかけても繋がらないんだよー！」

「……旅立つて、おいおい何だよそれ？ 何かヤバい言い回しじやないか？ 憂く嫌な予感がするぞ……？」

「もう何が起こっているのか全然わかんないんだよー。心配で心配

で、父さん、母さん、無事でいてくれ……。」

俺達が乗る車は土砂降りの続く都会の街を抜け、寂れてぬかるんだ田舎道を走つて抜けていった。そしまましばらく走つて行くと、暗闇の中の広い草原の丘の上に一軒の古い家が見えてきた。どうやら、この家がジャンの生家らしい。

「ああ、着いたぞ！ ジョセフ、早く降りて俺にきて来てくれ！」

「！」の歎の中をかよ？ 「冗談きついぜ、お前……？」

俺達は雨を凌ぐ為にコートを頭まで被り、水たまりの浮かぶ泥道を走つて家の玄関まで向かった。周り一面は真っ暗で、唯一の灯りは空に響き渡る落雷の光だけだった。ジャンの実家の窓にも明かりが灯つていなくて、俺は何やら事件の予感を感じて一抹の不安を覚えた。

「……なあ、ジャン？ 俺達が調べる前にまずは警察を呼んで待つてみるのも一つの手だぞ？ もしかしたら強盗か何かが先に侵入してるかもしれないし、用心に越した事ないと思つぜ？」

「何言つてんだよジョセフ！ 自分の家に帰ってきたのに何で用心なんてしなきゃいけないんだよー それに、その万事の為に俺はお前と一緒に連れて來たんだからな、ちゃんとしつかりしてくれよー？」

「俺は用心棒か！？　ふざけんなよ、お前……！」

嫌がる俺の「一トを無理矢理引っ張りながら家の玄関に辿り着いたジャンは、常に身につけていたキー ホルダーから合い鍵を取り出した。

……ガチャガチャ、ガチャ……

どうやらカギはちゃんと閉まっていた様だ。誰かに侵入された気配もない。とりあえず俺は一安心した。俺達はカギを開けびしょ濡れの「一トを玄関に置いて家の中へと入つて行った。

「父さん、母さん、大丈夫かい！？　聞こえたら返事をして！？」

ジャンが叫んでも、真っ暗で何も見えない部屋の中からは誰の返事も返つてこなかつた。中を照らすランプを探しに部屋の中に入つた俺達は、家内に立ち込める鼻のねじ曲がりそうな不快な異臭に気づいた。

「うわっ、何だよこの臭い！？」

「……この腐ったような臭い、まさか！？」

何とか手探りでランプを見つけ持つていたライターで火を灯し、家の一番奥のキッチンに入った俺達は田の前の光景に一瞬自分の田を疑つた。

真ん中に置かれたテーブルの上には息絶えた細身の中年女性が静かに横たわり、その上に椅子に座つたまま頭を突つ伏して倒れている初老の男性の首元は刃物の様なもので真横に切り裂かれ、まだ鮮血が床に滴り落ちていた。

「……お、おい、これってまさか……？」

「……父さん、母さん……！？」

「……う、うわあ！　し、死んでる、死んでるぞ、これ！？」

「父さん、母さん……！　うわあああああ……！」

目の前の突然の惨事に驚いた俺は一瞬パニックになりかけたが、それ以上に錯乱して泣き叫ぶジャンを抑える為に何とか我を取り戻し、すぐに家にある電話を取つて警察に通報した。

一番近い場所にいる警官でもここまで三十分くらいはかかるとの事。その間に、俺は両親の死に様を見て落ち着きを失っているジャンを何とか宥めようと必死になつた。

「……何で、何でだよー？　何で父さんと母さんがこんな田に……！？」

「ジャン、とりあえず落ち着けって！ もうすぐ警察も来て調べてくれるし、なつ！？」

「……神様、こんなのがんまりだ、あんまりだよ、父さん、母さん……」

床に崩れ落ち泣きじゃくるジャンの肩をを支えながら、俺はもう一度死んでいるヤツの両親の姿を見た。辺りには父親の首から噴き出したと思しき血が撒き散らされていたが、どうやら母親からは出血している様子は見られなかつた。

さつきのジャンの話の通り病魔に蝕まれていたのか、体はすっかり痩せこけていて顔色はすでに真っ白になつていた。もしかして、母親の死因は病死なのだろうか？

じゃあ、父親はその愛する妻の後を追つて自らの首を切つて自殺したのだろうか？ 室内を何者かに荒らされた形跡も無いし、それならジャンに電話をしてきた父親の最期の言葉も辻褄が合つ……。

「……何だ、これ？」

テーブルに置かれていた物を眺めていると、父親の首を切つた時に使つたらしい血の付いたナイフと年季の入つたボロい時代遅れのラジカセが一台置いてあつた。

俺は死体に触れないように恐る恐る手を伸ばしてそのラジカセを取り上げると、中に入つていたカセットテープを巻き戻して再生のボタンを押した。

It's a fine day.

People open windows.

They leave their houses.

Just for a short while.

They walk by the grass.

And they look at the grass.

They look at the sky.

It's going to be a fine night

tonight.

It's going to be a fine day to

morrow.

「……綺麗な歌声だな、誰の歌だろ?……?」

「……このラジカセ、それに、この歌……!」

流れてきたのは女性の美しい声で歌われた俺が聞いた事もない歌だつた。しかし、ジャンはその歌声に聞き覚えがあるみたいで、突然立ち上ると俺からラジカセを奪つてスピーカーに耳を寄せた。

「……間違いない、昔の、あの時の母さんの歌だ……」

「……お前の母親の歌? それが何で、こんなカセットテープにわざわざ録音されているんだ?」

「……俺が小さい頃、寝つけない時いつも母さんが耳元でこの歌を

歌つてくれたんだ、母さんの具合が悪くて寝込んだ時は、父さんがこのラジカセで歌を流して添い寝してくれたんだ……」

ジャンは溢れ出る涙を堪える様に手をつぶり、ウットリとその歌声に聞き惚れていた。確かにその歌声はとても透き通つていて暖かく、横で聞いていた俺も少し心に安らぎを感じていた。

「……母さん、大好きだった母さん……」

この夫婦は昔からこんな人里離れた田舎に住み、更に人目から避ける様に細々と生活を続けていたらし。そんな一人の間に生まれたジャンには遊び相手がいなくて、いつも母親と一緒にいたそうだ。ジャンが俺みたいな友達を作つて街に遊びに繰り出す様になつたのは学校に通い出してからの事。それまでは、ずっと家の中で父親や母親の後を追つて遊んでいたと本人から聞いた。

「……家の裏にはどうしても入っちゃダメだつて言われた場所があつて、イタズラ心で近づいてはいつも父さんに怒られていたつけ、そして、怒られて泣きじゃくる俺をいつも母さんは優しく抱き締めてくれて、この歌を聞かせてくれたんだ……」

「……ジャン……」

「……母さんは俺の顔を見て、いつも『普通の子みたいな暮らし가出來なくてごめんなさい』って泣いていたんだよ、俺はこの二人の子供に生まれてこれで十分幸せだったのに、いつかは立派な人間に

なつて一人に親孝行するのが夢だつたのに、何で、何でこんな事に

……？」

再びジヤンはその場に泣き崩れ、愛しい母親の歌声が聞こえてくるラジカセを強く抱き締めた。さすがに俺もその姿があまりに不憫で、ついつい涙腺が熱くなつた。何でこんな酷い事になつてしまつたのか、神はいつも残酷な鉄槌を俺達に振りかざす……。

ガタガタッ

「……何だ！？」

俺達とジヤンの両親の亡骸以外、誰もいないはずの天井から何か物音が聞こえてきた。確かにこの家には天井に屋根裏部屋があつて、そこを倉庫代わりに使つていたとジヤンが話していたが……。

「……確かこの家つて、お前の両親以外誰も住んでいなかつたよな
……？」

「……誰か隠れてる……！」

「……えつ？ 何だつて！？」

「間違いない！ 父さんと母さんをこんな目に合わせたヤツが、屋根裏部屋に隠れているんだ！ 許さない、絶対に許さない！！」

ジャンはテーブルに置いてあつた血の付いたナイフを手に取ると、怒りに任せて廊下の天井にある隠し階段を下ろして屋根裏部屋に向かつた。

「オイ！ お前、そんな物持つて何するつもりだ！？ 假にお前の言つ通り誰かが潜んでいたとしても、それが両親を殺した犯人とは限らないだろ！？ 死因も他殺がどうかもわからないのに、警察が来る前に勝手な事するなよ！？」

「どけよジョセフ！ お前は自分の家族が死んだ訳じやないからそんな事が言えるんだ！ 僕のこの気持ち、お前になんてわかるもんか！ 邪魔するんだつたら、お前も巻き添えにしてやるぞ！！」

その時のジャンの形相は今まで見た事が無いぐらいに怒りで変貌し、俺はその場に尻込みして止める事が出来なかつた。ジャンはこちらを振り返る事無くランプで足元を照らし、階段を上つていった。

「…………うわっ！ 何だよこの臭い、さつきよつ…………」

その時、俺は部屋中に立ち込める異臭が死体のあるキッチンとは別の場所から漂つてきているのに気づいた。確かに、あの夫婦の死体は腐っている形跡は無く、まだ死んで間もないくらいだった。

「……じゅあ、この臭いはどうか？……？」

次の瞬間、俺はさつきジャンが喋っていた話の内容を思い出した。父親から近寄る事を許されなかつた家の裏のある場所、それが気になつた俺は外に飛び出して玄関の裏側に回つた。

「……もしかして、これが……？」

家の裏には狭い階段があつて、下の地下室へと通じていた。入り口にある鉄の扉はすでに錆びきついて、ドアノブは外れ指が入るくらい開いていた。

「……うげえ！　何だこの臭い！」

中に入ると、まるで肉か卵が腐つた様な酷い悪臭が立ち込め、足を伸ばした床はグチャグチャに湿つていた。

俺は口と鼻を押さえながらどうにか燃えそうな布を手に取り丸めて火を付けると、真っ暗な部屋に向けて辺りを照らした。

そこで俺は、決して見てはならない禁断の世界を垣間見てしまった。

「うわああああああああ！」

その地下室の中には、ブルーシートにくるまれた『何か』が四体転がっていた。一体それが何なのかはハッキリとわからない。しかし、それが決して公には出来ないものだとすぐに悟った。

ブルーシートの隙間から覗く人の顔の様なもの。でもそれは、人間のそれとはまるで違う形と並び方をしていた。その中には腕や足が人間の正しい形とは異なる姿になつていてるものや、何の動物かわからぬ虫の様な形をしているものなどもあった。

「…………神よ、何て事だ……！ そうだ、ジャン！ 大変だ、ジャンが！！」

恐怖と絶望の中、火の付いた布を持ったまま地下室を逃げ出した俺は、そのまま家中に入つてジャンを捜した。もしこんな事がジャンに知れたら、きっとヤツは狂い出して何をしだすかわからない……。

「ジャン！ まだそこにいたのか！ すぐこここの家から離れよー！
後は全部警察に任せせて……！」

「…………あ、あ、ああ……」

ジャンは屋根裏部屋への階段を上りきった場所で、部屋の中をランプで照らしたままその場に立ち尽くしていた。その視線は部屋の中一点を見つめ、顔色は青ざめて膝はガタガタと震えていた。

「……嘘だ、嘘だよ！ こんなのは嘘だ、嘘だあ！！！」

「……オイ、お前、何を見てるんだ？」
「…………」
「なんだよー!? おー、ジャンー!?」

「俺は、俺は、うわあああああ！」

突然、頭を抱えて狂乱したジャンは階段から転げ落ちると、手にしていたランプを振りまして俺が持っていた火の付いた布を弾き飛ばした。その火は廊下の床に燃え移り、ジャンのランプも壁に当たつて飛び散りその火はジャンの服に燃え移った。

「熱い、熱い！－！」つぎやあああああ－－！」

「ジャン、火が！！！ どこへ行くんだ！？ ジャン……！！！」

火だるまになつたジヤンは、熱さにもがき苦しめながら両親が眠つてゐるキッチンに向かつて行つた。俺は何とかジヤンを助けようと後を追おうとしたが、周りを火に囲まれて先に進む事が出来なかつた。

「ジャンー ジヤヤヤヤヤヤンー。」

あつという間に火の手は家中に広まり、俺はそこから逃げ出すだけ

で精一杯だった。何とか命からがら外に出て後ろを振り返ると、炎はすでに屋根の上まで達していた。

「ギャギイギイギイイイイイイイイイ！」

燃え盛る家中から、まるで獣の様な身の毛のよだつ叫び声が聞こえてきた。これが、あの優しくて気弱だったジャンの声なのだろうか？ 僕にはとてもそういうとは思えなかつた……。

「オイ、君！ 君が通報した本人なのか!? 人が死んでいると聞いているのに、何で火事が起こっているんだ!? 一体、何があつたんだ!?!？」

やつと駆けつけてきた警官が、呆然と立ち尽くす俺の肩を掴んで訪ねてきた。もう一人やつてきた警官が必死で消火活動をしようと試みたが、もうすでに手の施し様の無い状態になつてしまつていた。

「……友達が、友達が、まだ中に……」

「駄目だ！ 僕達だけじゃどうにもならない！ すぐに応援を呼んでくれ！…」

「本署、聞こえるか!? 火事だ、火事が発生している！ 大至急、大至急消防隊をこちらに……！…」

俺は、何も出来なかつた。土砂降りの雨を霧に変えながら燃え崩れていく家を見て、自分が見てしまつたものを忘れようとするだけで精一杯だつた。この悪夢の様な現実が、どうか跡形も無く燃え尽き、淨化されるを願つて……。

「……神よ、我を我らを許したまえ……」

「……君の証言通り、出火場所は廊下とその隣りの部屋だという事が捜査の結果で解明されたよ、どうやら君の言葉に嘘は無いようだな」

あの後、俺は殺人と放火の容疑でしばらくの間警察に拘束された。しかし、現地の物証や残された遺体の損傷具合から証拠不十分でその疑いは晴れ、何とか釈放される事が許された。

「……君を疑つた事は私から謝らせてもうが、これも警察の仕事なもんでね、しかし、友達はとても残念な事になつてしまつたね……」

「……はい……」

「それと、友達のご両親は血の繋がつた兄妹同士の関係だった事も捜査の上でわかつたよ、禁斷の愛で結ばれた二人は、その過ちによ

つてこの世に産まれてきてしまった『彼ら』を地下室に隠して必死に周囲の目から守っていたのだろう、もちろん、この事実は君と私達警察だけの極秘事項にするけどね

「……お願いします、ジャンの為にも、この事は誰にも言わないで下さい……」

真っ黒に焼け落ちた家の屋根の下から、ジャンは変わり果てた姿で発見された。その傍らには被い重なる様に倒れていたになっていた両親の亡骸も見つかり、彼らは近くの村人達の手でその家の跡地に手厚く葬られたそうだ。家族仲良く一つの墓に、あの地下室で謎の焼死体として発見された『ジャンの兄弟達』と共に……。

「……しかし、君の証言とは食い違う点が一つだけあるんだがね……」

「……えっ？ それって、何ですか！？」

「君は確か、地下室で四体の遺体を見つけたと言ったね？ しかし、あの現場で見つかった遺体は全部で八体、君の友達とそのご両親を足しても一人多いんだよ」

「……そんな、そんなバカな！？ 僕は確かにあの時四体の……！」

「他に誰か人がいた記憶は無いか？ 例えば倉庫とか、天井裏とか……？」

「……！ 天井裏……！」

もしかして、あの時ジャンが屋根裏部屋で見て驚愕して狂ったのは、あの時俺が燃え盛る家の中から聞こえた獣の様な恐ろしい叫び声は、まさか……？

「……『何か』がそこにいた？　そして、生きていた……？」

俺とジャンの確かに思い出を語ってくれるものは、昔に撮った数枚の写真となぜかあの場に一つだけ無事に焼け残ったあの古いラジカセだけになった。俺は今、せめてもの償いとしてそのラジカセの力セットテープの歌を流しながら、一家が眠る墓の前で神に祈っている。

どうか彼らが愛情の果てに行ってしまった過ちを許し、安らかに天に召される事を。そして、今日の様な穏やかな晴天がいつまでも続く事を……。

It's a fine day.
People open windows.
They leave their houses.
Just for a short while.
They walk by the grass.
And they look at the grass.
They look at the sky.

It's going to be a fine night.

I
t's
going
to
be
a
fine
day
to
m
or
row
. .

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2358f/>

夏ホラー2008参加作品三作短編集

2010年10月8日23時47分発行